

ビオトープが小学生の環境意識に及ぼす影響に関する一考察

北河 建（生涯スポーツ学科 学校スポーツコース）

指導教員 中藺 伸二

キーワード：ビオトープ 環境意識 小学生

1. 緒言

近年、自然に触れる機会が減少する中、学校内においてのビオトープで自然に触れる機会を与え、自然の大切さを再確認させることが重要となってきた。今回の研究でビオトープの実態や児童へのアンケートなどを実施した京都市立 S 小学校は、他校と比べても規模が大きく、児童がビオトープに接触する場面が多い。小学校の中でもビオトープに長く触れ合っている高学年にビオトープに関する意識調査を行い、児童がビオトープと関わることで環境意識に影響しているのかを調査していく。

2. 研究方法

研究方法として3つあり、まず、教員へのインタビューによるビオトープ自体の調査を行い、次に京都市立 S 小学校の高学年8クラス247人の児童に対して環境意識に関する無記名自記式アンケート、さらに8クラスの担当教員に対しても環境意識に関する無記名自記式アンケートを行う。

3. 結果と考察

このビオトープは、60周年記念事業として作られ、PTA らの呼びかけで地域の方々が児童らと合同で約 600 平方メートルの大規模なビオトープを完成させた。このビオトープは、ポンプで地下水を汲み上げ、2時間ごとに地下水を足していき、24時間循環させていることが特徴のひとつである。また、ビオトープ内の植物や生き物も様々な種類が生息しており、植物に関しては、さるすべりやさくら、生き物では、メダカやホタルなどが生息している。

児童に対するアンケートの結果は、ビオトープの必要性は必要であるという意見が多く、不必要という意見は少数ながらもいた。その理由として怪我の可能性を挙げていた。また、ビオトープを利用した授業を多数の児童が覚えており、ビオトープやビオトープを利用した授業が児童の環境意識に影響していることが分かった。担当教員に対するアンケートでも、児童の回答の傾向とほぼ一致し、また、ビオトープが、児童の環境意識向上に有効としていた。

4. まとめ

低学年時での経験、授業時や休み時間などの教科学習以外での触れ合いなどを通じて、より一層、環境に対しての意識が高まるといえる。一方、良い影響ばかりではなく、生態系を崩すきっかけとなったザリガニを捕り、殺すという行為を目撃し、生き物の扱い方に疑問を覚えている児童もいる。若干ではあるが、ビオトープに触れ合っている期間が長ければ長いほど、環境意識は高まるといえる。

しかし、クラスの状態が環境意識を左右し、荒れているクラスと落ち着いているクラスでは、荒れているクラスのほうが、環境意識がやや低い傾向が考えられた。今回の研究で、児童が置かれている生活環境こそが、その児童の環境意識がどう変わるかに大きな影響を及ぼしていることも示唆された。

参考文献

阪神・都市ビオトープフォーラム編（2009）
検証・学校ビオトープ. 大阪公立大学共同出版会.